

やめられない とまらない 大相撲観戦ひとりごと
平成 28 年九州場所を終えて

< 1 > 騒がれた「今場所の見所」しかし・・・

マスコミや相撲関係者の間では「豪栄道の綱取り」と「高安の大関取り」ばかりが話題になっていたが、私の個人的見解としてはいずれも問題外で、的外れな見所だと思っていた。いずれも大方の期待や希望的観測を裏切る結果となったが、私の目からすれば当然の結末で驚くには値しない。過去のレポートでデータを示してコメントしてあるので、その詳細について再びコメントすることは差し控えることにする。

今場所の見所として私が注目していた第一番目は「大関陣の自然淘汰」にあった。「カド番の照ノ富士は残れるのか?」「次にカド番になるのは誰だろうか?」このようなことを繰り返しながら「遂に大関から陥落するのは誰か?」と言う点である。

この一年ほど新しい名前が何人か現れて時折印象に残る土俵を見せてくれている。第二番目の見所は、「世代交代のきざし」が感じられる昨今、「次代を担う若手力士は誰か?」と言う点である。

足腰が全く定まらず、初日から二連敗でスタートした照ノ富士の相撲は「間違いなく負け越して陥落するだろう」との印象だった。前半戦では白星を得はしたものの、不安定な腰つきはとて 15 日間戦えそうな感じではなかったが、少しずつ「攻め」が出るようになり 7 連勝、中盤を終わって 7 勝 3 敗と持ち直した。しかし横綱・大関戦で勝ち抜くほどの力は残っておらず、8 勝 7 敗で終わった。

そして入れ替わって、琴奨菊が 5 勝 10 敗と大きく負け越して来場所はカド番となった。あの時勢いに乗って横綱にしてしまったら、今頃どんな騒ぎになっているだろうか? その程度のことが読めずに「綱取り」騒ぎをする輩の気が知れない。そのような観点で豪栄道を眺めてみると、「まだ早い」ということがよくわかったはずである。

「来場所はどの大関が・・・?」来場所の見所の一つがはっきりした。

< 2 > 優勝はなんと鶴竜が

白鵬が通算 1000 勝を達成したが、その翌日辺りから足腰の不安定さが散見するようになってきた。そんな中で、ただ一人淡々と自分の相撲を取り続けた鶴竜が、いつの間にかトップに躍り出て賜杯をさらう結果となった。悪い癖だった「はたき」がなくなり、常に相手に前進の圧力をかけ続けながら二の手・三の手を繰り出していく相撲が目立ち功を奏した。もとより鶴ヶ嶺の流れを汲む「基本技術に長けたきれいな相撲」を取る技能派の力士なので、波に乗ると強い。来場所もこの波を続けてくれると一層面白くなるに違いない。

< 3 > 二羽の鷲が羽ばたいた

今場所「進化・飛躍」を感じさせた力士は、新小結の玉鷲と自己最高位の西前頭 10 枚目に躍進した荒鷲のモンゴル出身力士二人に絞ることが出来る。

玉鷲は突き・押しがメインの力士、これまでは乱暴な突き押しが目立つムラの多い相撲が欠点だった。今場所は、これまでより一腰低い姿勢で腰を前に移動させ続けながら相手の首や胸を突き続ける相撲が目立った。しかも、立ち合いが是正されて強い当りが出来るようになったので、長い腕が有効に働くようになり、威力を増した。初日日馬富士を粉碎し、大関陣を連破して 10 勝 5 敗、技能賞に輝いた。もしこの相撲が完全に自分の物として会得できているとしたら、来場所昇進が予想される関脇の地位も保っていける可能性があり、上位陣にとっても驚異になるかもしれない。



(右画像：千秋楽 遠藤玉鷲に完敗・報知新聞画像より借用)

二人目の鷲は玉鷲とは全く異質な荒鷲、正統派・技能派という表現がぴったりするような四つ相撲。力士の大型化が進む中で 185cm・131Kg の体は日馬富士に近い小型力士の部類に入ってしまう。峰崎部屋というあまり知られていない小部屋の出身なのであまり話題にはなっていなかったが、バネの効いた足腰で低い姿勢から突進して前まわしを引く相撲、浅い位置にまわしを取るきれいな右四つ、素早い動きでここ数場所めきめき力を付けて来た。荒磯部屋（元二子岳）に入門したが、師匠が定年退職で部屋を閉鎖するので花籠部屋へ移籍、花籠部屋が経営難から閉鎖することになり峰崎部屋へ移籍。しかも大相撲八百長事件で多量の力士の引退・廃業という事件の時、西幕下 3 枚目で 3 勝 4 敗と負け越していたにもかかわらず新十両に昇進という幸運な力士。しかしこれが災いしてか幕下・十両間を何度か往復、その後入幕を果たすも十両・幕内を何度か往復し、ラッキー新十両から数えて 5 年ようやく幕内に定着できたという印象。「目標にしている力士は鷲羽山」と言うからなんとなく納得できる感じがする。11 勝 4 敗の好成績を上げ、しかも技能が光る取り口ながら、上位力士と戦っていないため三賞の受賞が叶わなかった。

（右画像：荒鷲 正代を上手投げ・朝日新聞画像より借用）



< 4 > 新入幕の大活躍

今場所の新入幕は石浦と北勝富士。小兵の四つ相撲の石浦と突き押しをベースにした大きな北勝富士、対称的な二力士で、どんな結果になるか楽しみだった。

石浦は 173cm・114Kg ではあるが稽古で鍛えた張りのある筋肉。低い姿勢に耐えられる強靱な足腰で相手を下から横から攻め続けて休むことはない。舞の海と鷲羽山を合わせたような相撲で、会場を沸かせたばかりか優勝戦線の一部にも名を連ねる大活躍を遂げた。終盤戦になって上位力士とあてられたことで 10 勝 5 敗に終わったが、敢闘賞を手にした。一部には技能賞という声さえもあつたらしい。白鵬の付け人をしていた石浦が白鵬を凌ぐ成績になりはしないかと心配した向きもあった、なんとか横綱が面目を保った。

北勝富士は 183cm・159Kg、体を生かした突き押し相撲が信条。腰から前に体重をかけて前進しながら押し続けるので相手へのインパクトはかなり強い。新入幕で西前頭 11 枚目は家賃が高いかと心配したが、並み居る先輩力士と気後れせずに戦って 9 勝 6 敗は充分評価に値する。今の前進相撲を続け、立ち合いを更に磨いていくと幕内上位でも面白い存在になると思われるが、「これ以上体重を増やさないこと」と「はたきを覚えないうこと」が今後の大きな課題だとみている。

< 5 > その他の活躍力士

西前頭 6 枚目の栃ノ心は 10 勝 5 敗の好成績を上げたが、前半戦は 4 勝 4 敗でことによれば負け越しもあり得そうな状況だった。右四つを得意とするが、どちらのまわしでも取れば力任せの引きつけで相手を脅かす。上手を外から遠くにとるという悪い癖が出ていたし、あまり目を引くような改心の相撲は見られなかったが、後半星を戻し始めて、稀勢の里を撃沈する快挙もありにわかに注目を浴びた。

ここ数場所怪我の回復に手間取り苦労してきた勢が調子を取り戻してきた。8 枚目なので横綱大関とは当らず、自分のペースで相撲を取り続けられたという感じで 10 勝を上げた。やはり上位力士と当る地位に居て欲しい力士の一人である。

正代は前頭 3 枚目で 11 勝 4 敗の好成績を上げて敢闘賞を受賞した。今場所を含めて 5 場所にわたり 10 枚目以内の地位を守っているのは地力が付いてきたからだろう。柔らかな体で、攻め込まれても諦めずに最後まで何かを繰り出して勝負に挑む姿勢に加えて、先場所あたりから体全体で相手に圧力をかけながら様々な手段を講じていく相撲が目立ってきた。どちらかという受け身の相撲が目立つが、立ち合いに自らの意思を持って鋭く踏み込んでいく迫力を付けていかないと三役に定着出来るようにはならないだろう。

前半戦の遠藤の相撲は復調を強く感じさせた。鋭い踏み込みと素早い前みつ取り、突き押しでも攻め切れる相撲の幅、低い姿勢の継続と土俵際でさらに下がる腰の構え。初日高安に敗れはしたものの、その後照ノ富士・稀勢の里・琴奨菊と連破、そして 6 日目には白鵬にも勝ち 4 勝 2 敗、ことによると・・・と期待が広

がった。ところが中日を過ぎると少しずつ安定性が消え、脆さが出てきて黒星が多くなってきた。13日目を終えて7勝6敗まで漕ぎ着けたが、千秋楽に負け越しが決定するという結果となった。やはりまだ完全に復調したわけではなく、15日間を戦い抜ける体になってはいないようだった。本格的な復活は来場所か？

< 6 > 三賞の行方

今場所の全取り組みを見終わった結果の私なりの所感は前述のとおりである。

相撲記者クラブは、殊勲賞・技能賞・敢闘賞としてこんな力士を選んだが、私ならこの力士を選びたい。

	今場所の受賞者		私ならこう選ぶ
殊勲賞	該当なし	→	玉鷲
技能賞	玉鷲	→	荒鷲
敢闘賞	正代 石浦	→	石浦

(下画像：左から正代・石浦・玉鷲・・・報知新聞画像を借用)

< 7 > しめくくり

やれ高安だ、それ豪栄道だと騒ぎまくった方々が沢山いたが、(私に言わせれば) 予想通りの結果となった。そんな中で優勝戦線の一步外側をゆっくり歩いていた稀勢の里が三横綱を撃破して突如浮上してきたが時すでに遅し。鶴竜は逃げ切り、自らも黒星を増やしてしまい12勝3敗に終わり賜杯には近づくことは出来たが手にすることは出来なかった。しかし15日間の相撲内容を振り返ってみると、来場所もそれなりに大事な働きをしてくれそうな感じがしている。大関の地位を守るのが精一杯の大関ばかりの中で、今年の年間最多勝力士となった稀勢の里の69勝21敗(勝率0.767)は立派な成績である。これほどの出来栄の力士が横綱になれないのに、豪栄道や琴奨菊がそんなに簡単に横綱になれるわけがない。



初場所	大阪	五月	名古屋	九月	福岡	年間合計
9勝6敗	13勝2敗	13勝2敗	12勝3敗	10勝5敗	12勝3敗	69勝21敗



(左画像：稀勢の里白鵬を破る・サンスポ画像より借用)

主役である横綱・大関の存在は小さな揺らぎはあるもののまだまだ変わらない。しかしながら、この一年間で脇役の顔ぶれが変ってきた。中堅・若手に新しい顔が増えてきて、場所ごとに力を付けている力士が目に見えるようになってきた。時代は確実に動きつつあり、群雄割拠の段階に入りつつあり面白くなってきた。

また来場所が楽しみになってきた。だから、相撲はやめられない。

以上